

50年たって、やっと今

太宰府市

山本 千恵子

毎年5月の風が吹くと、私は「あかしやのたわわな花房」と「高貴な香りのすずらんの花束」を思い出す。私は北朝鮮の、それもずっと北の方の羅南（ラナン）で生まれ、9才の時の引揚げまそこで育った。羅南－白い花－3人の死－山の墓地－38度線－博多港へ、とつながる10ヶ月のことを、私はこの50年近くの間ずっと忘れようと努めてきたのであった。でも今年は違う。私は忘れようとしても忘れられなかった自分の引揚げ体験を、やっと今語りはじめ、記録しはじめている。

昭和20年8月13日、私たち子供4人は空襲を避けて地下室にいた。朝陽のまぶしい入口で、父と母が立ち話をしていた。その常ならぬ緊張した雰囲気、子供たちは息をひそめて二人を見守っていた。直後、父は応召していき、母は私たち4人を連れて山へと避難した。それがそのまま引揚げ行の第一歩となってしまったのだった。

羅南駅前の家へは戻ることなく、列車には一度も乗ることなしに、自らの脚だけを頼りに南下しなければならなかった。途中、保安隊と称する現地の人達が辻々に立ち、日本人を検査した。靴底に敷いたり、紐や衿に縫いこんで隠した現金は取り上げられていった。金目の品も次々と没収された。一方では「こっちの道の方が安全だよ」と教えられて、助かった場面もあったりしたが。

着たきりの無一物となり、靴は破れ、豆のできた足をひきずって南を目指したけれども、子供の脚で1日に歩ける距離は知れている。700kmあまりの山間部の行程を約3ヶ月かかって、咸興経由で興南へ辿り着いている。そこで収容所生活に入った。

着のみ着のままの衣類には、虱（しらみ）がわき、発疹チフスが流行した。そのために2才半の弟が死亡した。可愛く元気いっぱいだったのに、あかざなどの雑草を食べて耐えてきた逃避行で、体力は消耗しきっていたのだろう。

寒さのつづいてくる収容所には、暖房などはない。それどころか、ロシア兵が声高に女性を求めて踏み込んできた。そのロシア兵達の駐屯地からさえ、私達は食料を調達せざるを得なかったのだ。大きなゴミ箱に捨てられたじゃが芋の皮を拾ってきては、飢えをしのいでいたのである。ごく稀に材料が手に入るとダンゴなどを作って道端で売り、日銭を稼いだ。寒くて雨も降り出したある日、「もう帰ろうよ」と言っても、「これを売ってしまわないと」と動かなかった母に、泣きながら身をすり寄せていたのを、妹はよく思い出すと、「おかあさん、命懸けだったんだよね」とも。

母は看護婦と助産婦の資格をもっていた。あかしや並木の川辺の道を自転車を駆って往診に出かけ、朝鮮、日本双方の多くの赤ちゃんをとり上げた。内地への里帰りの折には、すずらんの花の咲いた茎だけを集めて大きな束にして、切り口を缶の水につけ、胸に抱いて持ち帰り、おば達を喜ばせていた。母の笑顔にあかしややすずらんが重なる。

母は身重だったのだが、自分は食べずとも、まず子供たちに食べさせていたのだった。翌2

1年2月、母は女の子を出産した。しかし、この子はこの世で呼吸することはなかった。母もその3日後に還らぬ人となった。

雪の舞う凍てついた日、私たち残された三姉妹は菰にくるんだだけの母を運ぶ大人たちのあとを、ただ黙々と山へと向かった。最近調べてわかった事だが、この山は通称“三角山”と呼ばれていた山で、そこには日本人引揚げ者のための墓、というより穴、が用意されていた。北朝鮮の冬は厳しい。地面が凍りつく前に、その冬の死者のために大きい穴を掘っておいたのだというが、その穴は予想を上まわる早さで埋めつくされていったという。興南、咸興、富坪の3市で、1万人以上の方々が亡くなられたと記されている。

母は自分の出産がどういう結果につながるのか、きっとわかっていたのだろう。姉に後事を託していたと思われる。小学6年の姉は母に代わって私と妹を守ってくれた。

やがて春が訪れ、北朝鮮の日本人たちは動きはじめた。早く38度線を越えなければ。もう凍死の心配はなくなったのだ。私共は、漁船による突破を試みたが、南といわれて上陸したところは然に非ず……再び歩き続け、河を渡ってやっとの事で南へ到達できた。安堵の故だろうか、南へ着いてから博多港上陸までのことは私は何も記憶していない。

小学生の女の子3人が38度線を越えて引揚げられたのは、周りの多くの方々の援助があったこと。おかげさまで私たちは昭和21年6月に引揚げてきた。博多港から父の郷里の熊本県の南関まで、親切な大学生が案内して下さった。南関の親戚、大牟田の叔父一家、富山県の母の実家と私達は転々としたのだが、近隣の多くの方々、先生方、友人など皆様から励まされ、支えられての引揚げ後の生活だった。ここで、お世話になった皆さま方に心よりお礼を申し上げたい。

幸い父も3ヶ月遅れで復員してきたのだったが、4人一緒に暮らせるまでには更に年月を重ねた。だから引揚げに要した10ヶ月が、1年とも、3年とも、いやそれ以上の期間だったようにも思えるのだ。

母たちの50回忌を迎える去年、私は定年を待たずに職を辞した。この年にこそやらねばならぬ事をやりたかったから。板門店まで出かけて、北の山々を望める地に立ち、両手を合わせてきた。墓参代わりの旅だった。何とかして北へ行きたい。あの山の穴の中に埋めおかれただけの方々はどうな思いで彼の地に眠り続けているのだろうか。その興南の三角山に参りたい。私は同じ思いの方々に呼びかけて、「すずらん会」(＝北朝鮮への墓参を実現させる会)を3回ひらいたところである。このことは父の遺志でもある。父は興南と羅南へ行きたい、といつも言っていたのに、叶わぬまま3年前に逝ってしまった。十数年前、父といっしょに韓国を旅したのだが、北へも一緒にいきたかったなあ、あかしやとすずらんの香る季節に行きたかったなあ、と残念でならない。

今、私は隣の二つの国のようすがとても気にかかる。北との一日も早い国交回復を望む。一日も早い南北統一を願う。必ずや北朝鮮へも行ける日が来ると信じて、遅ればせながら、隣の国のことばを学びはじめたところである。「アンニョンハシムニッカ」9年も住んでいて、ひとことも話すことのなかったことばを50年たって、今。